View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

国立国語研究所学術情報リポジトリ

基礎篇第三課　やすくないです　たかいです：形容詞とその活用導入

著者	国立国語研究所
ページ	1-47
発行年	1978-03
シリーズ	日本語教育映画解説 ; 3
URL	http://doi.org/10.15084/00002782

日本語教育映画解説 3

基礎篇
第三課

やすくないです たかいです

――形容詞とその活用導入――

国立国語研究所

前　書　き

国立国語研究所では、昭和４９年度以来、日本語教育部ついで日本語教育センターにおいて、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課５分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするものである。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにすることを願っている。この第三課「やすくないですたかいです」の解説は、主として日本語教育センター日本語教育教材開発室日向茂男、同日本語教育研修室石井久雄の執筆によるものである。

昭和５３年３月

国立国語研究所長

林　　大

目　　次

1. はじめに …… 1
2. この映画の目的・内容・構成 …… 2
2. 1. 目的・内容 …… 2
2. 2. 構成 ── 場面を中心として …… 4
2. 3. 語、語法、文型 …… 14
2. 4. 音声表現上の注意 …… 16
3. この映画の効果的な利用のために …… 16
3. 1. 形容詞について …… 17
3. 2. 語、語法の理解 …… 20
3. 3. 文型練習 …… 25
4. 形容詞文献抄 …… 32
資料 1　使用語彙一覧表 …… 35
資料 2　シナリオ全文 …… 44

1 はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩日本語学習期における視聴覚補助教材として企画・制作されたもので、この映画「やすくないです　たかいです」は、その第三課にあたるものである。

この映画の企画・構成・概要書の執筆などにあたったものは、次の通りである。

昭和49年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

池尾スミ	アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター専任講師
石田敏子	国際基督教大学専任助手
今田滋子	国際基督教大学助教授
川瀬生郎	東京外国語大学附属日本語学校助教授
木村宗男	早稲田大学語学教育研究所教授
斎藤修一	慶応義塾大学国際センター助教授
水谷修	国立国語研究所日本語教育部日本語教育研究室長

日本語教育部（当時）関係者（肩書きは当時のもの）

林大	日本語教育部長
武田祈	日本語教育部日本語教育研修室長

この映画「やすくないです　たかいです」は、主として水谷修委員の原案に検討を加えて作成したものである。

本解説書の執筆には、日本語教育センター日本語教育教材開発室の日向茂男、同日本語教育研修室の石井久雄があたった。

なお、この映画は、日本シネセル株式会社が制作を担当した。

現在、この映画は、より多くの人の利用の便をはかって下記9か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課

- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理課
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

また、この映画は、上記制作会社が販売している。

2. この映画の目的・内容・構成

2.1. 目的・内容

この映画「やすくないです　たかいです」は、日本語教育映画基礎篇の全般的な方針に従い、利用の便宜が考慮されている。すなわち、この「やすくないです たかいです」に即して言えば、「（ ＿は）＝です」および「（ ＿は）＝ないです」の ＝ に形容詞を入れた文型を与え、形容詞を学習させているときにあるいは、そうしたことについてひととおり学習させた後に、補助教材として利用されるものと予想して、この映画を企画してある。事実、こういう教材映画が利用されるとすれば、そのような利用のされ方が一般的であろう。しかし、また教材映画を主体として学習させる場合でも、初歩のある学習段階に到達させることはできるよう、配慮してある。

主要なねらいは、サブタイトルに「形容詞とその活用導入」とあるとおりである。日本語教育で最初に与える語は、ほとんど名詞である。名詞とともに、実質的な概念をもつものの主たるものとして、動詞・形容詞・形容動詞が重要である。文の述部に名詞をしか置くことができず、文の内容にA＝Bという等式のようなものしか選ばざるを得ない学習者の状態は、動詞などの導入によって、表現を飛躍的に豊富にすることができる状態に移っていくわけである。副詞・助詞・助動詞などで表現を明瞭化・繊細化する状態とは、それは異る状態である。その状態がここに始まることになる。

さて、日本語教育で最初に出る日本語としては、「—は＝です」の＝が名詞である文型に当てはまるものが一般的であり、日本語教育映画基礎篇でも、第一課「これはかえるです」でその文型を導入している。「やすくないです　たかいです」は、その「—は＝です」の文型の＝について、名詞からほかの語句への展開を図るものである。名詞以外の語句で＝の主力となるものに、形容詞、形容動詞語幹、助動詞を含む語句があるが、ここでは形容詞を導入する。次に述べるような活用の問題が控えているので、形容動詞は第6課「しずかなこうえんで」で、ほかのものは更に後で、導入する。ただし、「—は＝です」の打消しの表現である「—は＝ないです」は、動詞の導入を可能にしているものである。

形容詞は活用語であり、活用語である以上は当然に活用の問題が伴う。活用の概念は、形容詞によっておおまかに与えておくのがよいと思われる。動詞・形容動詞・助動詞も活用語ではある。しかし、動詞は、少なくも、規則的な活用をするもの2種類、不規則な活用をするもの2種類、という4種類があり、勢いそれぞれの活用語尾に振回されかねない。形容動詞は、語幹の扱いに、従って語尾の扱いにも、容易でないところがあり、「です」の扱いにまで大きい影響を及ぼす。助動詞は、一語一語が活用の種類を異にしていると言っても余り間違っていない状態で、活用形を部分的に欠いているものも多く、「です」の扱いに影響を及ぼすものもある。それらに比べれば、形容詞は、補助活用をもっていたり、命令形をもっていなかったり、難点もあるが、1種類の活用で基本的な活用である終止（連体）形を「＝です」に直ちに入込むことができ、動詞などよりも活用を理解させやすいのである。もっとも、活用形をここでひととおりは挙げておいたかと言うと、そうではない。助詞・助動詞がはいり込むのを避けて、一部の用法の終止形・連体形・連用形に留めてある。

視聴覚教材を通して教える形容詞としては、感情形容詞よりも属性形容詞を取上げるのが、穏当である。ここで取上げたのも、基本的な属性形容詞である。場面には、家具店にベッドを買いに来た男ふたりが、ベッドの色彩・大小・値段などを議論する、というところを設定した。また、最後の部分に、同じ男ふたりがレストランに行き、味などを議論する、という場面を設定した。男ふたりの議論の中に、反義語の関係にある形容詞の組み合わせが、頻繁に出てくる。語を与えるのに反義語とともに与えると、学習者は覚えやすい、ということを顧みたので

ある。

この映画は、実験的に人形劇で制作してみた。余分な状況、例えば目ざわりな背景や個人的な登場人物の癖をできる限り排除することによって、中心をきわ立たせることができないか、という実験である。この実験は、しかし、成功の程度は余り高くなく、かえって不自然なところもめだつ。だが、こうした試み自体は貴重であり、今後、学習項目やそのねらいによっては再び同種の実験が試みられてよいであろう。

2.2. 構成 ― 場面を中心として

2.2.1. 映画での場面や言語表現については、以下の通り扱う。

1. 映画での構成に従って、場面を分ける時にはⅠ、Ⅱ、Ⅲ……のようにし、それを更に小場面に分ける時には、Ⅰ－1、Ⅰ－2、Ⅰ－3……のようにする。
2. 言語表現については、文単位で①②③……のように通し番号をつける。文を変形引用する時には、′の印をつけ、①′ ②′ ③′ ……のようにする。変形引用が二つ以上ある時には、″ ‴……の順で′を重ねていく。

文単位の認定には多少問題のあるところもあるかもしれないが、ここでは積極的には文の問題には触れない。①②③……の文番号は、使用語彙一覧で引用される文やシナリオ全文でのものと共通である。

2.2.2. この映画は大きく3部分になっている。第1はタイトル、第2および第3は、中村という男とリーという男との議論である。これらをⅠ、Ⅱ、Ⅲとして以下にせりふを挙げる。

Ⅰ　タイトル

タイトル　日本語教育映画

タイトル　やすくないです　たかいです

「やすくないです　たかいです」のタイトルが出るときに、黒子が人形を持って現れている。「黒子」はクロゴまたはクロコ。元はクログ「黒具」すなわちクログソク「黒具足」で黒装束のことであるが、転じて、浄瑠璃の人形遣いや歌舞伎の後見役といった、黒装束をしている人を指す。この映画では劇中に黒子の姿

が見えることはないが、浄瑠璃や歌舞伎では見えるのが自然である。しかし、黒子は見えても見えないことにするというのが、浄瑠璃や歌舞伎での約束である。

Ⅱ　ベッド売場で

リーのベッドを買うために、中村とリーとふたりで売場へ行き、店員も交えてあれこれ品定めするが、結局はリーの気に入るものがなかった、という場面である。

Ⅱ－1　店頭で

中村とリーとが連立って売場に現れる。

リー「①たくさんありますね。」

ベッドの数について言ったもの。ベッドを求めてやってきたので、話題は中村とリーとの間でわかり切っていることであり、わざわざ「ベッドが」と言ってはいない。いいものがいくつもありそうだ、という期待の表現である。多過ぎてうんざりだ、というときの表現と比較すると、「たくさん」の聞こえが大きく、「あります」の聞こえが小さい。

Ⅱ－2　見本を見ながら

リーが見本を見て中村に相談している。そこへ店員が現れる。

リー「②この青い色のベッドはありませんか。」

中村「③えーと、青いのはないですね。」

店員「④いらっしゃいませ。」

まず、ベッドの色選びから始まった。②の「この」は「この色」である。リーは、見本の中から「この色」（「青い色」）を選択し、中村にきいた。「ありませんか」のような否定の形の問掛けは、英語などでも同様であるが、「あります」のような肯定の形の答を期待しているものである。ここでは、その期待が裏切られている。③の助詞「ね」は、「残念ながら」という気持を添えていて、②の「ありませんか」という期待に対応するものである。

②の「ありません」と③の「ないです」とは、動詞および助動詞によるか、形容詞によるか、で違っている。

②′ この青い色のベッドはないですか。

③′ えーと、青いのはありませんね。

でもよい。ただし、この交替の関係は、「ます」「です」を除いたときには、成り立たない。「ある」には否定の形、すなわち打消しの助動詞「ない」がつくことがないからである。

②の「青い色のベッド」と③の「青いの」とに注意。③「の」は、勿論②の「ベッド」を受けているが、受けを正確にするならば、③は「青い色の」となる。②にしても、話題はわかっていることであり、「青い(色)の」で充分である。なお、「ベッド」は、英語bedの借用語で意味も同様であり、1970年大阪万国博覧会で有名になって英語に帰ったbeddoではない。

「いらっしゃいませ」は、ていねいな言い方。規模が大きく、人手も多くて教育の行届いているところで、使われる。家族だけでやっているような小さな店では、客がきちんとしていて初めてでも、「いらっしゃい」で済ませるであろう。

Ⅱ—3 短いベッドの前で

店員についていくと、いいベッドがありはしたが、長身のリーには短かった。

中村「⑤これはどうですか。」

リー「⑥これはいいですね。」

リー「⑦短いですね。」

中村「⑧短くないですよ。」

中村「⑨うーん、背が高いですね。

⑩このベッドは短いですね。」

形容詞による答を予想する問掛けには、「どう」を用いる。⑤の「どう」は、⑥の「いい」とまさしく対応している。しかし、「どう」の問に対する答は、例えば⑥に準ずるなら

⑥′ これは手ごろですね。

⑥″これはぴったりですね。

⑥‴これは悪くないですね。

⑥⁗これはいけますね。

というように、形容詞に限らず、形容動詞・副詞などいろいろな形で可能である。

⑥″″のように、「どうですか」の問に「＿＿ます」で答えても、不自然なところ少しもない。つまり、「どう」の側から言えば、答は文であればよいのである。

⑦と⑧は、肯定と否定の関係にある。形容詞の否定の形は、この映画全体を通して、「＿＿ないです」である。否定の形には、また、

⑧′ 短くありませんよ。

のような、文型もある。②・③′・⑧′が「ありません」で並行し、②′・③・⑧が「ないです」で並行していて、どちらか一方の系列を採っていればすっきりしてよかったかも知れないが、実際の運用としては、この映画の②・③・⑧または②・③′・⑧あたりが大勢であるようにも思われる。また表現文型の方から言えば、ものの存在の有無を言う言い方と、形容詞が述部に入る時の肯定・否定の言い方の問題になる。初級段階では、文型としての理解のしやすさと標準文体設定の両面の問題がからんで難しいところである。

「背が高い」の助詞「が」は、ものの性質について述べたときの「が」であり⑨では「は」であってはいけない。「背は高い」とすると、文脈として、「頭はよい、スポーツはできる、……」あるいは「しかし、胴が長く、足が短い、」といった対比を予想することになる。ここの「胴が」「足が」にも注意。⑨は、⑩との対比において、

⑨′ あなたは背が高い。

⑩′ このベッドは長さが短い。

のように考えられるものである。なお、⑮を参照のこと。

「背が高い」は、垂直に立っているもの「背」で、下端から上端までが長い「高い」、ということである。「高い」は、反義語「低い」とともに、また、上方にあるもの「たこ」など、基準の面から突き出ているもの「鼻」などについても言われる。それに対し、「ベッドは短い」は、垂直とかいうような条件を問題にしないもの「ベッド」で、一端から一端までが隔たっていない「短い」ということである。反義語「長い」も同様である。上の「背は高い。しかし、胴が長く、足が短い。」でも、条件を問題にする「背」に対し、「胴」「足」が条件を問題にしないので、「長い」「短い」が現れている。

⑤の「どうですか」は、「いいと私には思われますが、あなたにはどうですか」の意味であると考えられ、それに対応して、⑥の助詞「ね」は、③のそれと異な

り、⑤の意を取って同意を表現していると考えられる。

⑤′ これはよくないですか。

⑥′ そうですね。

という対話も、成り立つ余地が充分にあるのである。⑦の助詞「ね」は、③のそれに同じである。⑧は⑦に直ちに反論したもので、助詞「よ」は、相手の主張が不満であって相手を説得しなければならない、という気持ちの表現である。中村とリーは、しばしばこの助詞「よ」を使って議論をしていて、そのことから、ふたりの間柄が対等であると理解できる。目上の人に「よ」を使うことは、礼を失することになるのが通例である。⑨の助詞「ね」は、判断に加えた感嘆の表現で、文頭の感動詞「うーん」と対応する。⑩の「ね」は、⑥のものと同じく同意の表現で、同意の対象は⑦である。

Ⅱ—4　長いベッドの前で

店員の案内で、中村とリーは長いベッドのところに来るが、今度は値段が高い。

店員「⑪長いベッドもあります。」

リー「⑫中村さん、これはいいですよ。

⑬これは短くないです。」

中村「⑭うん、いいですね。」

リー「⑮色は薄いですが。」

中村「⑯薄くないですよ。

⑰濃いですよ。」

リー「⑱これは高いです。」

中村「⑲高くないですよ。

⑳安いです。」

リー「㉑高いですよ。」

⑭の感動詞「うん」は、納得したということを、自分自身を相手として表現したもの。感動詞「うん」は、肯定の返事にも使うが、ここはそれではない。「うん」は「はい」にくらべてあまりていねいな言い方ではない。⑭の文末の助詞「ね」は、相手の言ったこと⑫⑬が納得して認められたので、⑩のように同意の表現として出された。

⑮の「色は薄い」は、助詞「が」を用いて、「色が薄い」でも自然である。助詞「が」が可能であるのは、⑨「背が高い」が助詞「が」であるのと同じ理由による。⑮は、助詞「は」によって、「ほかの点は全く申し分ないが」という含みが、明瞭になっている。

同じく⑮は、助詞「が」で終わっている。この逆接の接続助詞は、⑮の場合には逆接の意味をもっていて、後に続く部分が省略されているとも言うことができる。日常では、この「が」や、やはり接続助詞である「けれども」「けれど」は文末に頻繁に用いられる。しかし、それらは、多くの場合、逆接の意味をもたず、文末の断定を柔らかい感じにし、相手の反応を待つ調子になっているだけである。ただし、そうした「が」は、終助詞と扱われることがある。また、接続助詞「が」は、文中において、逆接の意味をもたず、単に前後を結びつけているだけのことが、しばしばある。

⑯と⑰は、同じ内容で、反義語を使って言換えた関係にある。強調した言い方である。後の⑲⑳、㉕㉖、㉘㉙、㉜㉝、㉞㉟もそれぞれ同様の関係に立っている。

ここの場面では、議論が助詞「よ」の応酬で埋められている。⑫のものだけは、相手への不満というものがなく、説得したい気持ちを素直に表現したものであるが、ほかの⑯・⑰・⑲・㉑のものは、⑧のものに同じである。そういう中で、助詞「ね」の添わっていない⑳は、かえって断定がきっぱりさせられている。

リーは、㉑を言捨てるように言って、首を振りながら去っている。付合っていられないということで首を振るのは、日本人の動作のパターンとしては一般的にはないように思われる。リーは、もとより日本人ではない。

Ⅱ—5　別の長いベッドの前で

長いベッドは別にもあるので、更に見てみるが、リーには堅いし重いしで気に入らない。

リー「㉒堅いですね。」

中村「㉓堅くないですよ。」

リー「㉔重いです。」

中村「㉕重くないです。

　　㉖軽いです。」

㉔～㉖で、リーと中村は、それぞれベッドを持ち上げてみている。ベッドの重さを考えたりするかどうかも問題なしとしないが、同じようなふたりに持ち上げることができたりできなかったり、あるいは、妙な方向から力をかけてベッドが浮いたり、映画には現実離れがある。ちょっと背や長さを測ってみたり、ベッドがむき出しでばかり置かれていたり、値段表が店の感じとは裏腹にぶっきらぼうであったりするのも、現実離れである。しかし、映画は、そういうことをほとんど感じさせていない。映画のゆえであるよりは、人形劇のゆえであろう。人形劇とか漫画とかは、向かう者に、人形劇とか漫画に向かう構えを、あらかじめ取らせてしまうのであろうか。

Ⅱ—6　ソファー＝ベッドの前で

ソファー＝ベッドがあったが、リーは値段が高いと言う。

中村「㉗小さいですか。」

リー「㉘小さくないです。

　　㉙大きいです。」

リー「㉚高い。」

中村「㉛えっ。」

中村「㉜高くない。

　　㉝安い。」

リー「㉞安くない。

　　㉟高い。」

中村「㊱安い。」

否定の形の問いがしばしば肯定の形の答えを期待しているからといって、肯定の形の問いが否定の形の答えを期待しているというようなことは、傾向としてもない。㉗㉘の肯定・否定は、たまたまそうなったのである。㉗の問いは、小さいかも知れないと心配したための、大きいとも小さいとも予想のついていない、単純な疑問である。

㉚は、「です」も何もついていない形容詞「高い」一語だけから、文が成っている。聞手のことなど思ってもいない、従ってていねいの「です」も付け加えられなかった、驚きの言葉である。⑱が、「これは高いです」と、聞手にきちんと向

かって言った、しかも「これは」を補う余裕をもっていたのとは、全く対照的である。㉛の「えっ」は、㉚を言った態度に呼応する。すなわち、聞く構えのできていなかったところに、相手が突然ものを言ったので、何を言ったのか一瞬わからず、聞き返しの表現となったのである。ただ、相手の言葉が短かったため、耳に残っていた響きをたどってその言葉を了解することができ、ワンテンポ遅れながらも、相手が言葉を繰り返さないうちに、反応して次の行動へ移ることができたのである。

㉜以下は、形容詞がそのまま言切りに使われて、話が進められている。㉚のときとは異なり、聞手のことは意識しているのであるが、これまでの議論の延長で議論しているため、感情も既に高ぶっていて、相手にていねいに応ずるだけの余裕がもてないのである。このあたりの文の末尾に、助詞「よ」が添わってきたりするようになると、もはや本格的なけんかである。「です」「ます」を使わない場面は、なお、一々ていねいに応じ合う必要のない親しい間柄での会話など、日常的にいくらも見られる。

Ⅱ—7　ベッド選びは終わり

リーの気に入るベッドはなく、中村とリーの間も雲行きが怪しくなり、ベッド選びは結局むなしく終った。

中村「㊲うーん、うん。」

リーは勝手に立去り、それを見送る中村の諦め。ため息を鼻音で表現したようなもの。ふたりの後姿を見ながら、店員は唖然としている。

Ⅲ　レストラン

中村とリーは、レストランへはいり、パンと肉を食べている。

Ⅲ—1　パンを食べながら

中村「㊳このパンは古いですね。」

リー「㊴新しいです。」

中村「㊵堅いですよ。」

リー「㊶いいえ、柔らかいです。」

「古い」「新しい」および「堅い」「柔かい」という反義語の組合せが、現れている。「堅い」「柔かい」の組合せは、㊵㊶の中で、㊶に「いいえ」という否定が表現されていることにより、反義語と知れる。これまでの⑯⑰以下㉜㉝までにたびたび現れた言い方にならえば、㊴・㊶は、

㊴′ 古くないです。新しいです。

㊶′ いいえ、堅くないです。柔らかいです。

と言うことができる。相手の言ったことをそのまま受けて否定の言葉を加える、いままでの言い方よりは、㊴・㊶の言い方の方が、柔らかい感じを与える。

㊵の文末の助詞「よ」は、⑫のものに近い。注意を促している。

Ⅲ—2 肉を食べながら

肉を切って食べ始める。

中村「㊷薄いですね。」

リー「㊸厚くないですね。

㊹ハハハ。」

中村「㊺まずいですね。」

リー「㊻いいえ、おいしいですよ。」

㊷の「薄い」と㊸の「厚い」が反義語の関係にあることが、それぞれの文末にある助詞「ね」によって確認される。㊷で「薄い」について助詞「ね」によって同意を求めたのに対し、㊸で「厚くない」として助詞「ね」によって同意を与えたのである。㊺の「まずい」と㊻の「おいしい」が反義語の関係にあることも、㊻の文頭の「いいえ」のほかに、それぞれの文末にある助詞「ね」「よ」によって確認される。㊺で「まずい」について助詞「ね」によって同意を求めたのに対し、㊻で「おいしい」として助詞「よ」によって不満を表わしつつ逆の主張をしたのである。

㊹の「ハハハ」は、朗らかな笑い。㊸にも出る。「ヒヒヒ」「フフフ」……、「カカカ」「キキキ」……、……などと比較のこと。

Ⅲ—3 肉にこしょうをかけて

リーが中村の肉にこしょうをたっぷりかけ、中村がそれを食べる。

中村　「㊼辛い。」

この形容詞の言切りは、㉚に似ている。ただ、「熱い」「痛い」のように感動詞に似ているものにも、近い。「熱い」「痛い」は、㊼のように瞬間的に反応して口に出した場合には、最後につまる音 ッを伴うのが普通であり、また、アツ ッ、イタ ッのように語幹になるのもしばしばである。㊼の「辛い」は、 ッを伴って自然であるものであるが、㉚の「高い」には ッは不自然である。「辛い」が「熱い」「痛い」と同じく対象からの感覚を表現し、「高い」が対象の属性を表現する、という意味の大きな違いが、根本にあるであろう。

Ⅲ—4　コーヒーを飲んで

コーヒーが運ばれてくると、中村はすぐに手を出した。

中村「㊽うっ、苦い。」

「うっ」は、苦い、辛い、痛い、熱いなど、不快な感覚が、言葉にならなかったときの声。この後にはワン＝テンポ置かれるので、次の「苦い」は、㊼の「辛い」に準ずるが、ッを伴わない。

Ⅲ—5　コーヒーに砂糖を入れて

リーが中村のコーヒーに砂糖を入れ、中村はそれを飲み直す。

リー「㊾苦いですか。」

中村「㊿いいえ。」

リー「(51)甘いですか。」

中村「(52)はい、甘いです。」

中村、リー「(53)ハハハハハ……。」

「苦い」と「甘い」が対になって現れてきているが、「甘い」の反義語は「苦い」ばかりではない。「良薬は口に苦し」と言われる言外などでも「苦い」「甘い」はなるほど対をなすが、また、「甘辛」などと「辛い」「甘い」が対をなし、「すいも甘いもかみ分けた」などと「すい」「甘い」が対をなす。「甘い」を取り巻いていろいろな味覚語があると言うべきである。色彩・温度などに関する語の関係も、複雑である。

最後の場面は、ふたりの仲の察せられる穏やかさをもっている。

2.3. 語、語法、文型

この映画で使用される語は、基本語ばかりであり、当然のことながら、形容詞に属するものが多い。その形容詞について、基本的な意味の関係をおさえておく便のため、いま国立国語研究所『国立国語研究所資料集 6　分類語彙表』(1964年、秀英出版)の分類に沿いつつ、一覧すると、

3.120　ナ゜イ

3.133　イ゜イ

3.1661　フル゜イ　アタラシ゜イ

3.1920　タカ゜イ　ナガ゜イ　ミジカ゜イ

3.1921　オオキ゜イ　チイサ゜イ　アツイ　ウスイ

3.193　オモイ　カルイ

3.37　タカ゜イ　ヤス゜イ

3.502　アオ゜イ

3.505　オイシイ　マズ゜イ　アマイ　カラ゜イ　ニガ゜イ

3.506　カタイ　ヤワラカ゜イ　コ゜イ　ウスイ

のようである。「ない」は、存在する意味の「ある」の反義語としても、形容詞の打消しで助動詞的な語としても、現れる。「高い」は、長身の意味と高額の意味とで現れる。「薄い」は、「厚い」とともに材の厚薄について、また「濃」とともに色の濃淡について、現れる。

形容詞などの答を期待した問の語として、

ド゜ウ

が現れる。以上のほかに現れる語または語句は、

イロ゜　セ゜　ベ゜ッド　パ゜ン

ナカムラサン

コレ　コノ

ノ(形式名詞)

タクサン

アリマ゜ス　アリマセ゜ン

デ゜ス

ワ　モ　ガ(格助詞)　ノ(格助詞)　ガ(接続助詞)

カ　ネ　ヨ

ハ⌐イ　イイエ

エ（聞返しの聞投詞）　エート　ウーン　ハハハ……　イラッシャイマ⌐

セ

である。

形容詞の活用形として、

「＿＿です」の連体（終止）形

「＿＿ないです」の連用形

連体修飾の連体形

言切りの終止形

が現れる。逆に言えば、

言止（さ）しの連用形

連用修飾の連用形

「＿＿ございます」などの連用（音便）形

「＿＿ば」の仮定形

および、補助活用の

「＿＿う」の未然形

「＿＿た」などの連用（音便）形

は、現れない。後に学習される項目と言えよう。ここでは、形容詞とその活用の導入がねらいである。

文型の中心は、

（＿＿は）＿＿です

の＿＿に形容詞を入れるもの、および、この応用として、

（＿＿は）＿＿ないです

＿＿に形容詞の連用形を入れるものである。ただし、これらは、実際には、間投助詞「ね」または「よ」をしばしば伴って現れてくる。

「（＿＿は）＿＿です」の文型の応用としては、また、形容詞などによる答えを期期待した質問の

（＿＿は）どうですか

がある。

ほかに、注意すべき文型として、存在することを期待しながら質問するが、文法上は存在の意味に打消しが加わった、

——はありませんか

が現われる。これは、もちろん、第二課「さいふはどこにありますか」の学習延長上にあるものであるが、第二課と関係なくここでの学習項目として取扱ってもかまわない。

24. 音声表現上の注意

映画の実際の音声は、シナリオには書き取り切られていない。アクセントやイントネーションのことはおくとして、少なくも次のものの表記は、音声に忠実でない。

うっ

うーん

うーん、うん

ハハハ　　ハハハハハ……

かなは、多くのいわゆる表音文字と同じく、セグメンタルな音韻に対応するだけのものであり、その音韻というのは、厳格な体系を構成する語にしか関与しない。なんらかの体系を構成してはいるかもしれないが、ほとんど生理的な声である、上のようなものを、かなでは表わし得なくとも、当然である。もとより、シナリオを音声記号でつづることには、意義を見出し難い。

3. この映画の効果的な利用のために

2.では主にこの映画の場面に即して形容詞その他の問題をみてきた。ここでは、まず日本語の形容詞について概説し、次に形容詞の活用を与えることを主目的とした文型練習を例示する。教授上に必要なものを、適宜抜き取りながら利用・応用されたい。

なお、教材として、この映画を実際の教室でいかに効果的に利用するか、という点に関しては、第一課「これはかえるです」の解説書を参照されたい。

3.1. 形容詞について

フランス語・ドイツ語を初めとするヨーロッパ諸言語では、形容詞は、名詞とともに一類を成して、動詞と対立する。すなわち、基本的には、名詞を修飾する語であり、その語形変化も、名詞のそれに、簡素化の加わった格好で酷似している。しかし、日本語の形容詞は、名詞を修飾することが必ずしも基本なのではない。

1. 文を終止する。
   このベッドは安い。
2. 文を中止し、重文を作る。
   安く、しかも品がいい。
3. 接続助詞を下接し、複文を作る。
   あのベッドが安くても、これを買う。
4. 名詞を修飾し、複文を作る。
   安くて品がいいものを買う。

という用法は、動詞にも形容動詞にも通ずるものであり、しかも、動詞・形容詞・形容動詞いずれにおいても、基本的なものは、しいて言うことになるが、1.であるとしてよい。いろいろな用法に対して活用形としての分化が見られるが、未然形・連用形……といった枠は、動詞・形容詞・形容動詞に共通に設定することができる。つまり、日本語の形容詞は、フランス語・ドイツ語などとは対照的に、動詞・形容動詞とともに一類をなし、名詞と対立する。

しかも、形容詞は、動詞・形容動詞とともになす一類の中にあっては、形容動詞に近く、動詞に遠い。形容動詞に近いということは、実は、それだけ、動詞から名詞への距離よりも、名詞への距離が小さいということである。形容詞が動詞との間に見せる対立は、用法の上においては、次のとおりである。すなわち、形容詞の用法上の特徴として、

1. 動詞・形容詞・形容動詞を修飾する。
   いいベッドを安く買う。
2. 命令を直接に表現できない。
3. 助動詞を下接しにくい。

ということを挙げることができるのであるが、1、2、3、すべてにおいて動詞

と対立し、動詞では、

2. 買え。

3. 買いたい。買うらしい。買わない。買った。買おう。買うまい。……

のようである。ただし、3については、飽くまでも、形容詞は助動詞を下接し「にくい」という、相対の問題であり、

安いらしい。安かった。安かろう。……

といったものもあるのではある。形容詞の以上の特徴は、形容動詞についても言えることである。

いいベッドに静かに寝る。

静からしい。静かだった。静かだろう。……

のようである。

形容詞が形容動詞に近いことは、語幹の独立性を通しても知ることができる。形容動詞の語幹の独立性については、ここに言わない。動詞の語幹は、いわゆるサ行変格活用複合動詞を除けば、ゼロ語尾にせよ語尾をとり、独立することがない。形容詞の語幹は、次のように用いられている。ただし、一部の形容詞に限って固定されているものがあり、それについては例を挙げる。

1. 単独で名詞、副詞、感動詞を作る。

悪　ずる　早　煙　痛　痒　寒　熱

2. 重複して形容詞、副詞を作る。

弱々しい　重々しい　近々　広々と

3. 二つで名詞を作る。

高低　遠浅

4. 接頭語「お」を上接し、名詞を作る。

お古　おめでた

5. 名詞を上接し、名詞、形容動詞を作る。

売上高　夜寒　意地悪（だ）　気軽だ　気長だ

6. 形容詞、動詞、動詞連用形または名詞を下接し、複合語を作る。「＿＿過ぎる」は生産的である。

悪賢い　細長い　荒立てる　若返る

遅咲き　深追い　近道　浅瀬

7. 格助詞「の」、助動詞「そうだ」を下接する。後者は生産的である。

長の（別れ）

8. 接尾語「さ」「み」「げ」を下接し、名詞、形容動詞を作る。「＿さ」、形容動詞「＿げ」は生産的である。

強み　厚み

というようである。

意味の面で、形容詞は時間の推移を意識せず、動詞は時間の推移を意識する、と言われる。

鈍い　緩い　痛い　楽しい　親しい

鈍る　緩む　痛む　楽しむ　親しむ

などの対応に、それはうかがうことができる。形容詞に動詞「なる」を伴わせるなり、動詞に助詞「て」を介して動詞「いる」を伴わせるなり、してみればよい。動詞と形容詞との間で反義語の関係に立っているように見える

若い　貧しい

老いる　富む

などについても、「なる」「ている」を伴わせてみればよい。ただ、形容詞「ない」と動詞「ある」との関係が、理解しにくくはあるけれども。こうした反面で形容詞と形容動詞とは近しさを見せ、例えば、双方にわたって活用をしているような語がある。

細かい　暖かい　四角い

細かだ　暖かだ　四角だ

といったものである。形容詞「大きい」「小さい」「おかしい」に対しては、一形しかないために一般に連体詞と扱われているが、形容動詞連体形と認めてもよい「大きな」「小さな」「おかしな」がある。また、形容詞と形容動詞との間で反義語の関係に立つものがある。

汚い　粗い　乏しい

綺麗だ　滑らかだ　豊かだ

などである。

形容詞が形容動詞と対照的である点を挙げれば、第一に、語幹の独立性が相対的に小さいことであり、それについては既に触れた。第二に、語幹が原則として

和語を基本とすることであり、例えば、複合語「縁遠い」でも和語「遠い」が基本になり、例外的なものは「鬱陶しい」「麗麗しい」などごく少数である。第一点と第二点とを形容動詞の側から逆にまとめて言えば、形容動詞は、動詞に対立する形容詞・形容動詞の群の中にあって、その対立する動詞の中でサ行変格活用動詞が占めていると同様の地位を占めている、ということになろうか。第三には語尾が形容動詞とは全く異質であることである。

形容詞		ク	イ	イ	ケレ
形容動詞		ニ		ナ	ナラ
動詞	a	i	u	u	e
	Ø	Ø	ル	ル	レ

というのは、恣意的に簡略化した図表であるが、動詞とともに細部まで周知のことであろう。

形容詞には、動詞・形容動詞以外のほかの品詞と通う面もないわけではない。それは、語幹の用法によって既に察せられたところである。この映画で取上げた文型「＿＿です」は、「＿＿だ」とともに、形容詞を、名詞・副詞・形容動詞語幹に近く見せ、動詞にかえって遠く見せている。ただし、「＿＿でしょう」「＿＿だろう」「＿＿なら」は、動詞についても成立する。「＿＿です」に対応する動詞の「＿＿ます」は、動詞を孤立させている。

3.2. 語、語法の理解

3.2.1. この映画は、形容詞の基本的語彙ももとより尽くしてはいないが、また、2.3.に触れたとおり、用法も尽くしてはいない。現れない用法も含めて、問題点をいくつか、注しておく。

そもそも、「＿＿は＿＿です」の文型で＿＿に形容詞を入れることができるか、現状の日本語では問題がある。書言葉の規範では、ですます体で書かれても、言切りのところにきた形容詞は、「です」をつけられず、そのまま裸であるのである。しかし、「です」のつけられた形も慣用として普及しているし、話言葉では「です」に伴われないとかえってぞんざいに思われるほどであり、この映画では「です」を伴う形容詞を原則とした。「です」のつけられた形の形容詞が普及し

たについては、それなりの背景があるとも言える。すなわち、「＿でしょう」「＿ですね」といった、「＿です」の展開した形においては、＿に形容詞を入れることが規範として認められているのである。ただし、動詞についても、「＿でしょう」の形は認められていて、そのことからすれば、形容詞の「＿です」の形の普及の問題には別個の観点を必要とするようにも思われる。ちなみに「＿だ」や「＿だった」やの形で＿に動詞または形容詞を入れることはできないが、「＿だろう」「＿なら」では＿に動詞も形容詞も入れられる。

「＿です」の＿に形容詞を入れることができるかという問題は、当然、「＿ないです」が是か非かという問題につながっている。規範としては、もちろん、非であり、または「＿ありません」を要求するであろう。しかし、この映画では、「＿ないです」を通し、「＿ありません」を全く顧みなかった。裸の「＿ない」は裸の形容詞一般とは異なり、ぞんざいな感じをもつ。

形容詞に対して「＿です」を認めたのを貫いた、というわけでも必ずしもない。「＿ないです」が普及している現実を支えとしてはいるけれども。すなわち、

1. 名詞について「＿です」「＿で（は）ありません」と対応する文型に、単純には形容詞を代入できない。例えば、「安いです」とは言えても、「安いで（は）ありません」とは言えない。「＿ありません」例えば「安く（は）ありません」を導入するためには、活用形の交替に加えて「で」の消去を扱わなければならず、日本語入門期には好ましくない。
2. 「＿です」「＿ないです」という肯定否定の対応関係は、覚え易い。＿が形容詞である場合のみでなく、「＿で（は）ないです」と「で（は）」を補うことによって名詞・形容動詞・副詞にも応用できる。「＿ありません」を導入しても、この否定に対応する肯定「＿あります」を入門期に導入することが好ましくない。
3. 「＿ないです」は、一方に、「＿らしいです」「＿ようです」「＿そうです（伝聞）」「＿たです」「＿そうです（推定）」など、「ない」を入換える応用を予定し、他方に、＿に動詞を入れる応用を予定することができる。2.に述べた応用もある。「＿ありません」は、そのような応用を予定することができない。

というような理由が、あったのである。

なお、「＿ない（です）」の「ない」は＿が動詞であるときには助動詞であると言われながら、＿が形容詞であるときには形容詞であると言われる。理由は、

1. 形容詞と「ない」との間には、「は」「も」「さえ」といった助詞を入れることができ、更に名詞・副詞などを入れることができる。例えば、「安くは決してない」のように。
2. 形容詞に続く「ない」は、打消の助動詞「ぬ」をもって置換えることができない。例えば、「安くぬ」とか「安くず」とかの言い方はない。

という点にある。動詞を上接した「ない」については、「買わはない」などは不可であり、「買わぬ」「買わず」などは可である。しかし、助動詞「ない」と形容詞「ない」とは、同起源であると推定されていて、活用も全く同じであり、上のような用法の差に留意すれば、学習者には同じものとして与えても差支えない。ついでをもって言えば、形容詞「ない」を伴う「＿ない」と解されがちであるが、実はそのように分解できない一形容詞であるものがある。「幼ない（いとけ）」「汚ない」「しどけない」「はしたない」などの「ない」は形容詞形成接尾語、「切ない」「如才ない」の「ない」は助動詞「なり」が転じて形容詞化したものである。「いけない」は動詞「いける」と打消の助動詞「ない」の結合が転じて一形容詞となったもの、「みっともない」は「見たくも無い」の転である。

映画に現れてきていない用法につき、注を二三加えておく。「＿ございます」などに入れる連用（音便）形では、語幹の末尾母音と語尾の音便「う」とが融合して、末尾がやや変わる。その融合は、

語幹末尾母音 i →	音便形末尾ュー	美	シュー
a →	(才)ー	(赤)	アコー
o →	(才)ー	(白)	シロー

のようである。音便形は、「有難うございます」「お早うございます」など、日常の挨拶で頻繁に現れるので、むしろ挨拶として学習者に与えておく必要がある。

仮定形による「＿ば」の表現は、形容詞に限らず、固定した表現のほか、必ずしも多くは使われないように見受けられる。「＿なら」「＿と」「＿たら」で置換えられるのである。

安ければ	→	安いなら	安いと	安かったら
買えば	→	買うなら	買うと	買ったら

静かならば → 静かなら　静かだと　静かだったら

のようである。「なら」「たら」は助動詞「だ」「た」の仮定形であるが既に助詞化していて、「と」は助詞であり、三者の間で意味が分化している。助詞「ば」は、それを合せ持っているのである。仮定形による「＿ば」は、また、形容詞・動詞について、

安ければ → 安けりゃ

買えば → 買いゃ（→買やぁ）

売れば → 売りゃ

のように「＿（イ）ゃ」と転じた形をもっている。助動詞についてもほとんど同様である。逆から言えば、仮定形による「＿ば」で「＿（イ）ゃ」をもたないものは、形容動詞および助動詞「た」「だ」「ようだ」「そうだ」のみで、しかもこれらの場合には、上からも推測されるとおり、助詞「ば」を伴わずに仮定形のみで「＿ば」に代わることができる。要するに、助詞「ば」は、衰退の途をたどっているわけなのである。

カリ活用の未然形による「＿う」の表現は、上の「＿ば」より事情が進展している。助動詞「う」は、動詞についての意志の表現を除き、また「安かろう悪かろう」のような固定した表現を除けば、つまり推量の表現のほとんどの場合、単独では余り用いられず、「だろう」という複合語に取って換わられる。

安かろう → 安いだろう

買おう → 買うだろう

静かだろう

のようであり、形容動詞の場合はもともとの語尾「だろ」によって「う」が支えられているが、これもつまりは「だろう」である。

3.2.2. 国立国語研究所『国立国語研究所報告 21　現代雑誌九十種の用語用字』第1分冊（1962年、秀英出版）により使用頻度が大きいと認められる形容詞を、国立国語研究所『国立国語研究所資料集6　分類語彙表』（1964年　秀英出版）に従い、多少の変更を加えて、挙げておく。語幹だけを示す。他の項を参照すべきものには、その項の番号のコンマ以下を注記した。

3.101　正し

3.112　等し　紛わし

3.120　無　空し　珍し

3.123　易し345　た易　難し(むずか)　難(にく)

3.132　おかし3010、306　途んでも無

3.133　好(い)　良(よ)　宜し　悪　適し(ふさわ)　いけな

3.134　素晴らし　危な

3.14　強584　弱584　激し345　荒345、182　凄　物凄

凄まじ　酷

3.1660　早194　遅194　幼　若

3.1661　新し　古

3.182　鋭　鈍　丸　四角　険し　緩　粗14、345

3.1920　長　短　遠　近　広　狭　高503、37　低503

深　浅

3.1921　大き　小さ　細か　厚368　簿506　太　細

3.193　重　軽

3.194　速1660　遅1660　のろ　慌し(あわただ)

3.195　多　少　乏し

3.1993　甚し

3.300　眠　だる　煙　眩し　痛　痒　擽った

3.3010　快　楽し　嬉し　おもしろ　おかし132、306　心強

心細

3.3011　苦し　辛(つら)　悲　寂　鬱陶し515　悩まし　恐し　怖(こわ)

3.3012　恥ずかし　悔し　惜し　欲し　じれった　有難

3.302　好まし　懐し　恋し　羨し　恨めし　頼もし　親し

かわい　かわいらし　憎　憎らし　ばかばかし

3.304　賢　疎　そそっかし

3.305　旨505　まず505　たどたどし

3.306　詳し　怪し　おかし132、3010　疑わし

3.31　うるさ503　喧し503

3.330　卑し341　輝かし502　華華し　みすぼらし

3.332　忙し(いそが)

3.3 35　めでた

3.341　偉　卑し330　ずる　ずうずうし

3.342　そそっかし

3.343　気難し

3.345　優し132　勇まし　荒14、182　激し14

3.347　しつこ505

3.368　篤1921

3.37　貧し　高1920　安

3.501　明る　薄暗　暗　著し　淡

3.502　白　黒　赤　黄色　青　美し　醜　見苦し　見っとも無
輝かし330

3.503　高1920　低1920　喧し31　うるさ31　騒がし　騒騒し
騒騒し

3.504　臭

3.505　おいし　旨305　まず305　甘　酸っぱ　辛(から)　苦　渋
しつこ347　くど

3.506　清　汚　堅　柔か　脆　濃　薄1921

3.515　暑　暖　涼　寒　熱　温　冷た　清清し　鬱陶し3011

3.584　逞し　強14　弱14

3.3. 文型練習

形容詞の活用を与えることを主目的とする。

なお、例文はすべてかたかな書きにして、アクセント記号をつけた。

A．口ならし

ネムイ　　ネムク　ナ┐イ

ネム┐イデス　　ネムク　ナ┐イデス

上段左右から下段左右へ、左列上下から右列上下へ、繰り返し、形容詞末尾のイ～クの交替をのみこませる。アクセントに注意。「＿＿です」においては、形容詞は、すべて、語幹末尾、語尾「い」の前に、アクセントの滝をもつ。
「＿＿ない」のアクセントは、下のとおり。

ケムイ　　ケムク　ナ┐イ

クスグッタイ　　クスグッタク　ナ┐イ

ダル┐イ　　ダ┐ルク　ナ┐イ

イタ┐イ　　イ┐タク　ナ┐イ

カユ┐イ　　カ┐ユク　ナ┐イ

マブシ┐イ　　マブ┐シク　ナ┐イ

語例は、映画に現れなかった感覚形容詞から、『分類語彙表』3.300によって出した。

なお、「いい」は、終止形・連体形においてのみ語幹イであり、終止形・連体形を含むすべての活用形で語幹ヨである。

{イ┐イ / ヨ┐イ}　　ヨ┐ク　ナ┐イ

{イ┐イ / ヨ┐イ}デス　　ヨ┐ク　ナ┐イデス

ただし、ヨイデスは使わないかも知れない。

B．肯定と否定

「＿＿（ない）です」の肯定と否定との形を、応答で練習させる。

アナ┐タワ　ウットウシ┐イデスカ↗

イイエ→　ウットウ┐シク　ナ┐イデス↘

ココロヨ┐イデス↘

矢印は、概略のイントネーションを示す。「いいえ」だけに終わらせず、否定「「＿＿ない」の形と反義語の肯定の形とで答えさせる。

クルシ┐イ　　タノシ┐イ

カナシイ　　ウレシ┐イ

「苦楽を共にする」「悲喜こもごも」というのは、慣用句である。「喜」と「嬉しい」とは異なるが、準じて合せてみた。感情形容詞を視聴覚教材で扱うことはむつかしく、この映画でも取り入れていない。その中には、反義語を形容詞で見出し得ないものも多いが、肯定否定の一方だけの答えでも、与えておいてよい。『分類語彙表』3.3010～3.302には、

オモシロ┐イ　　オカシ┐イ

ツライ　　サビシ┐イ

オソロシ┐イ　　コワ┐イ

ハズカシ┐イ　　アリガタ┐イ

クヤシ┐イ　　オシ┐イ

ホシ┐イ

ナツカシ┐イ　　コイシ┐イ

ウラヤマシ┐イ　　タノモシ┐イ

シタシ┐イ　　バカバカシ┐イ

カワイ┐イ　　カワイラシ┐イ

ニク┐イ　　ニクラシ┐イ

などが挙がっている。

否定には別型「＿＿ありません」がある。「＿＿ないです」の「ないです」を、「ありません」に換えればよい。

アナ┐タワ　ウットウシ┐イデスカ↗

イイエ→　ウットウ┐シク　アリマセ┐ン↘

なお、「です」を伴わない「＿＿ない」に対し、「＿＿あります」「＿＿ある」の形を与えることはしない。

C・名詞の修飾

名詞を修飾する形容詞を、言換えの形で練習させる。

コレワ　ホ┐ンデス↘　　アツ┐イデス↘

ソレワ　アツイ￣ホ┐ンデス↘

コレワ　ウス┐イデス↘

ソレワ　ウスイ￣ホ┐ンデス↘

第1行および第3行を与え、第2行および第4行を答えさせる。「　　です」と連体修飾の「＿＿」で、アクセントが移っていることに注意。初めの口ならしの「眠い」についても起こっている。「厚いです」と「熱いです」とは、「厚い（器）」と「熱い（器）」とがアクセントを異にするにもかかわらず、完全な同音になっている。

アツイ（ウツワ）　　アツ┐イ（ウツワ）

「アツイ￣ホ┐ンデス」の「￣」は、「厚い」と「本です」が、文節を越えて

アクセントのまとまりとして一体化していることを示し、従って、「ツイホ」の部分が高いのである。次の例は、連体形で挙げ、文節を越えたアクセントのまとまりは考えない。

イエ┐	オオキ┐イ	チイサ┐イ
ヒモ	フト┐イ	ホソ┐イ
イシ┐	オモイ	カルイ
クルマ	ハヤ┐イ	オソイ
シンブン	アタラシ┐イ	フル┐イ

なお、初めの例文の第4行を

ウヌイ¯ホ┐ンモ　アリマス↘

と改めると、名詞の修飾を主部で行ったものが得られる。

形式名詞「の」を導入し、名詞の修飾を応用する。

タカ┐イ　キ┐ガ　アリマ┐ス

ヒク┐イ　キ┐モ　アリマ┐ス

タカ┐イノワ　スギデ┐ス

ヒク┐イノワ　マ┐ツデス

練習では、第1行　第2行　および「杉」「松」に当たる部分を与えてもよいし、「高い」「低い」「木」「杉」「松」　に当たる語を与えるだけでもよい。なお、スギのようにアクセントの滝をもたない名詞は、アクセント単位として「です」と一体化しているときには、そのデのあとの滝によって高くなる。

オオキ┐イ	チイサ┐イ	
ハナ┐	キク	タ┐ンポポ
フト┐イ	ホソ┐イ	
イ┐ト	モメン	キ┐ヌ
アオ┐イ	アカイ	
シンゴウ	ススメ┐	トマレ┐
アカルイ	クライ	
トコロ┐	ヒナタ┐	ヒカゲ
アマイ	カラ┐イ	
モノ┐	サト┐ウ	シオ┐

第3問、「青い」の色は緑であり、意味の広がりに注意する。また、「進め」「止まれ」は、動詞の命令形であるが、「進め(止まれ)の指示」の意味としていま名詞扱いしてみた。第4問・第5問の名詞「所」「物」は抽象的であるが、形式名詞「の」は一般に「もの」と置換えることができると言われる。

上の形式名詞「の」は、いずれも主部に現れたものである。形容詞と名詞を適宜入換えれば、述部に現れる「の」が得られる。

スギガ　アリマ┐ス↘

マ┐ツモ　アリマ┐ス↘

スギワ　タカ┐イノデス↘

マ┐ツワ　ヒク┐イノデス↘

名詞「木」が現れていないことに注意。述部の形式名詞「の」は、説得のための強調の助詞「の」と紛れ易いが、いまはそのことに触れない。

D．形容詞の活用

この映画に現れた形容詞の活用をまとめる。

A．の口ならしにひとつ加えた

ネムイ　　ネムク　ナ┐イ　　ネムイコト

ネム┐イデス　　ネムク　ナ┐イデス

による。形容詞だけによる言切りは練習していなかったが、それだけでも使えることを指摘した上で、基本の形を「ネムイ」として与える。アクセントの移動は、その形から決定できる。

形容詞の活用形すべてを与えることはしないが、進んだ段階での学習として応用できる用法を、二三注記しておく。

第1に、

アナ┐タワ　ネムク→　ワタシワ　ダル┐イ↘

というような、連用形の用法がある。

アナ┐タワ　ネムクテ→　ワタシワ　ダル┐イ↘

でも同じである。

第2に、

ネムク　ナ┐イ　トキ

という、否定で名詞を修飾する用法があり、これは与えておくべきであろう。

また、

ネムイ　ダ┐ルイ　トキ

という用法がある。

ネムク　ダル┐イ　トキ

ネムクテ　ダル┐イ　トキ

でも、意味は変わらない。

第3に、

アリ┐ガトウ（ゴザイマス）

オハヨウ（ゴザイマス）

など、挨拶として固定した音便形がある。ただし、これは、形容詞に特に関係づけて与える必要はない。

なお、形容詞を尋ねる文型「どうですか」についても練習をしなかったが、

ワタシワ　ダル┐イデス↘
アナ┐タワ　ド┐ウデスカ↗

ワタシワ　ウットウシ┐イデス↘
アナタ┐ワ　ド┐ウデスカ↗

のようにして応用できるであろう。「どう」は、名詞を修飾する形としては「どんな」であり、これを使って、名詞を修飾する形容詞を尋ねることができる。

コレワ　ド┐ンナ　ホ┐ンデスカ↗

アツイ　ホ┐ンデス↘

部分の特徴を表す文型「＿＿が＿＿」は、ここで特に与えないでよいが、参考のために記す。

E．例文

メ┐ガ　クロ┐イデス

アタマ┐ガ　イ┐イデス

カラダガ￣ヨワ┐イデス

これらは、「日本人は」とか「あなたは」とかを補うことができ、むしろ「……は＿＿が＿＿です」の文型の一部と考えるのがよいと思われる。（「……は＿＿が＿＿です」の文型は、第八課「どちらがすきですか」などで取り扱われる。）

キショウガ¯ハゲシ┐イ

キガ¯ツヨイ

シンコウガ¯アツイ

ヨウスガ¯オカシ┐イ

イエ┐ガ　マズシ┐イ

ニワガ¯セマ┐イ

ミ┐ドリガ　オオ┐イ

ミチガ¯ケワシ┐イ

テ┐ンキガ　イ┐イ

ソ┐ラガ　アオ┐イ

キオンガ¯タカ┐イ

ミチガ¯クライ

「たくさんあります」などについて、

F．例文

タクサン　アリマ┐ス↘

カ┐ナリ　アリマ┐ス↘

アマリ　アリマセ┐ン↘

ゼンゼン　アリマセ┐ン↘

この文型も、特にここで扱わなければならない理由はない。「たくさん」「余り」などは、副詞であり、「余り」「全然」など、否定の「ない」を述語に一応要求するものもある。

感動助詞「ね」（「よ」）を覚える。

G．例文

イ┐イ　テ┐ンキデスネ↘

ハイ→　イ┐イ　テ┐ンキデスネ↘

イイエ→　ワル┐イ　テ┐ンキデス（ヨ）↘

顔を合わせたときの挨拶には、始めによく天気の話題が出る。相手との意思の疎通を図ろうとするのか、恐らく必ず助詞「ね」を伴う。相手へ働きかける気持を

語として表す感動助詞は、日本語の特質のひとつをなすと言われるが、それをこなすことが、さほど簡単ではない。「よ」などは、相手の言葉を否定しているときには、相手の感情を害すること必至である。場合によっては「ね」にもそういうことがあるが、ともかく上のようなパタンがあり、そのようなパタンから使用法にはいっていくのが穏当であろう。

ウットウシ┐イ　テ┐ンキデスネ↘
（ハイ→）　ウットウシ┐イ　テ┐ンキデスネ↘
（イイエ→）　スガスガシ┐イ　テ┐ンキデス（ヨ）↘

アツ┐イデスネ↘
（ハイ→）　アツ┐イデスネ↘
（イイエ→）　サム┐イデス（ヨ）↘

アタタカ┐イデスネ↘
（ハイ→）　アタタカ┐イデスネ↘
（イイエ→）　スズシ┐イデス（ヨ）↘

更に、「うっとうしい」と「すがすがしい」、「暑い」と「寒い」、「暖かい」と「寒い」を、それぞれ入換えてやってみる。また、例えば、「暑い」を肯定して「暖かい」、否定して「涼しい」とするようなことも、ごく普通である。

助詞「ね」「よ」は、女性の言葉としては、相手への働きかけの勢いをやわらげるため、「のね」「わね」「のよ」「わよ」などとなっている。

アツ┐イノネ↘
（エエ→）　アツ┐イワネ↘
（イイエ→）　サ┐ムイワヨ↘

4. 形容詞文献抄

学術誌掲載論文からは採らなかった。一著者が一冊を費して日本語文法の全貌を論じたものも挙げなかった。それらについては、下記書の参考文献を見られたい。

飯豊毅一　1973　「形容詞・形容動詞の語幹・各活用形の用法」（鈴木一林 1973 pp. 163−206.）

大久保忠利－奥津敬一郎　1975　『新・日本語講座2　日本文法の見えてくる本』　汐文社
大野　普－柴田　武　1976　『岩波講座日本語6　文法Ⅱ』　岩波書店
川端善明　1976　「用言」（大野－柴田　1976　pp.169－217.）
鈴木一彦－林　巨樹　1973　『品詞別日本文法講座4　形容詞・形容動詞』　明治書院
西尾寅弥　1972　『国立国語研究所報告44　形容詞の意味用法の記述的研究』　秀英出版
――――　1975　「『ぼくは悲しい』けれど『彼女は悲しがる』――感情・感覚形容詞の特色――」（大久保－奥津　1975　pp.81－96.）
西尾寅弥－宮島達夫　1971　『国立国語研究所資料集7　動詞・形容詞問題語用例集』　秀英出版
橋本四郎　1977　「品詞論の諸問題――体言と用言――」（明治書院 1957　pp.51－76.）
林　大　1964『国立国語研究所資料集6　分類語彙表』　秀英出版
林　巨樹－斉藤正人－飯田晴己　1973　「古今形容詞一覧」（鈴木－林 1973　pp.208－231.）
村内英一　1959　「形容詞」（明治書院　1959　pp.203－226.）
明治書院　1957　『日本文法講座Ⅰ　総論』　明治書院
明治書院　1959　『続日本文法講座Ⅰ　文法各論編』　明治書院

資料1　使用語集一覧

これは映画中に使用された全ての語と使用文例を一覧表にしたものである。資料2.のシナリオ全文のせりふ同様、教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな、かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
   2－1. 「です」に対する「ではありません」を見出し語にしている。
   2－2. 「あります」「ありません」を見出し語にして「ます」はここでは取り上げていない。
   2－3. 「いらっしゃいませ」を見出し語にしている。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつきなどに基づいて下位分類する場合には、(1)(2)……のようにした。
   3－1. 形容詞は語義と活用の形で下位分類してある。
   3－2. 「です」は、「です」「ですか」「ですね」「ですよ」「ですが」により下位分類してある。
4. 使用文例は、文例の文頭の①②……の順に提出した。(1)(2)……と下位分類した場合も、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文の場合には、㉖㊿のように数字を横に並べ、引用を一回ですました。ただし、同一文でも文中において語の用いられる位置が異なれば、引用を繰返した。

   なお、文例の文頭の①②……は、シナリオに現われた文の通し番号でこの解説書全体に共通のものである。
5. 見出し語の横には〔　〕で当用漢字の範囲内で漢字を示し、また、その横には（　）で語の使用回数を示した。
6. 文例の使用環境を知りたい場合には、資料2.のシナリオ全文を参照のこと。

あおい〔青い〕（２）

② このあおいいろのベッドはありませんか。

③ えーと、あおいのはないですね。

あたらしい〔新しい〕（１）

㊴ あたらしいです。

あつい〔厚い〕（１）

㊸ あつくないですね。

あまい〔甘い〕（２）

㊶ あまいですか。

㊷ はい、あまいです。

あります（２）

① たくさんありますね。

⑪ ながいベッドもあります。

ありません（１）

② このあおいいろのベッドはありませんか。

いい（３）

⑥ これはいいですね。

⑫ なかむらさん、これはいいですよ。

⑭ うん、いいですね。

いいえ（３）

㊶ いいえ、やわらかいです。

㊻ いいえ、おいしいですよ。

㊿ いいえ。

いらっしゃいませ（１）

④ いらっしゃいませ。

いろ〔色〕（２）

② このあおいいろのベッドはありませんか。

⑮ いろはうすいですが。

うっ（１）

㊽ うっ、にがい。

うすい〔薄い〕（３）

(1)⑮　いろはうすいですが。

(2)㊷　うすいですね。

(3)⑯　うすくないですよ。

うん（１）

⑭　うん、いいですね。

うーん（１）

⑨　うーん、せがたかいですね。

うーん、うん（１）

㊲　うーん、うん。

えっ（１）

㉛　えっ？

えーと（１）

③　えーと、あおいのはないですね。

おいしい（１）

㊻　いいえ、おいしいですよ。

おおきい〔大きい〕（１）

㉙　おおきいです。

おもい〔重い〕（２）

(1)㉔　おもいです。

(2)㉕　おもくないです。

か（５）

②　このあおいいろのベッドはありませんか。

⑤　これはどうですか。

㉗　ちいさいですか。

㊾　にがいですか。

㊶　あまいですか。

が（２）

(1)⑨　うーん、せがたかいですね。

(2)⑮　いろはうすいですが。

かたい〔固い〕（３）

(1)㉒　かたいですね。

㊵　かたいですよ。

(2)㉓　かたくないですよ。

からい〔辛い〕（１）

㊼　からい。

かるい〔軽い〕（１）

㉖　かるいです。

こい〔濃い〕（１）

⑰　こいですよ。

この（３）

②　このあおいいろのベッドはありませんか。

⑩　このベッドはみじかいですね。

㊳　このパンはふるいですね。

これ（５）

⑤　これはどうですか。

⑥　これはいいですね。

⑫　なかむらさん、これはいいですよ。

⑬　これはみじかくないです。

⑱　これはたかいです。

さん（１）

⑫　なかむらさん、これはいいですよ。

せ〔背〕（１）

⑨　うーん、せがたかいですね。

たかい〔高い〕（７）

(1)⑨　うーん、せがたかいですね。

(2)⑱　これはたかいです。

㉑　たかいですよ。

(3)㉚㉟　たかい。

(4)⑲　たかくないですよ。

(5)㉜　たかくない。

たくさん（１）

①　たくさんありますね。

ちいさい〔小さい〕（２）

(1)㉗　ちいさいですか。

(2)㉘　ちいさくないです。

です（36）

(1)⑬　これはみじかくないです。

⑱　これはたかいです。

⑳　やすいです。

㉔　おもいです。

㉕　おもくないです。

㉖　かるいです。

㉘　ちいさくないです。

㉙　おおきいです。

㊴　あたらしいです。

㊶　いいえ、やわらかいです。

㊷　はい、あまいです。

(2)⑤　これはどうですか。

㉗　ちいさいですか。

㊾　にがいですか。

㊶　あまいですか。

(3)③　えーと、あおいのはないですね。

⑥　これはいいですね。

⑦　みじかいですね。

⑨　うーん、せがたかいですね。

⑩　このベッドはみじかいですね。

⑭　うん、いいですね。

㉒　かたいですね。

㊳　このパンはかたいですね。

㊷　うすいですね。

㊸　あつくないですね。

㊺　まずいですね。

(4)⑧　みじかくないですよ。

⑫　なかむらさん、これはいいですよ。

⑯　うすくないですよ。

⑰　こいですよ。

⑲　たかくないですよ。

㉑　たかいですよ。

㉓　かたくないですよ。

㊵　かたいですよ。

㊻　いいえ、おいしいですよ。

(4)⑮　いろはうすいですが。

どう（ 1 ）

⑤　これはどうですか。

ない（ 11 ）

(1)③　えーと、あおいのはないですね。

(2)⑧　みじかくないですよ。

⑬　これはみじかくないです。

⑯　うすくないですよ。

⑲　たかくないですよ。

㉓　かたくないですよ。

㉕　おもくないです。

㉘　ちいさくないです。

㊸　あつくないですね。

(3)㉜　たかくない。

㉞　やすくない。

ながい〔長い〕（ 1 ）

⑪　ながいベッドもあります。

なかむら〔中村〕（ 1 ）

⑫ なかむらさん、これはいいですよ

にがい〔苦い〕（２）

(1)㊾ にがいですか。

(2)㊽ うっ、にがい。

ね（12）

① たくさんありますね。

③ えーと、あおいのはないですね。

⑥ これはいいですね。

⑦ みじかいですね。

⑨ うーん、せがたかいですね。

⑩ このベッドはみじかいですね。

⑭ うん、いいですね。

㉒ かたいですね。

㊳ このパンはふるいですね。

㊷ うすいですね。

㊸ あつくないですね。

㊺ まずいですね。

の（２）

② このあおいいろのベッドはありませんか。

③ えーと、あおいのはないですね。

は（10）

② このあおいいろのベッドはありませんか。

③ えーと、あおいのはないですね。

⑤ これはどうですか。

⑥ これはいいですね。

⑩ このベッドはみじかいですね。

⑫ 中村さん、これはいいですよ。

⑬ これはみじかくないです。

⑮ いろはうすいですが。

⑱ これはたかいです。

㊳　このパンはふるいですね。

ハハハ（１）

㊹　ハハハ。

ハハハハハ……（１）

㊸　ハハハハハ……。

はい（１）

㊷　はい、あまいです。

パン（１）

㊳　このパンはふるいですね。

ふるい〔古い〕（１）

㊳　このパンはふるいですね。

ベッド（３）

②　このあおいいろのベッドはありませんか。

⑩　このベッドはみじかいですね。

⑪　ながいベッドもあります。

まずい（１）

㊺　まずいですね。

みじかい〔短かい〕（４）

(1)⑦　みじかいですね。

⑩　このベッドはみじかいですね。

(2)⑧　みじかくないですよ。

⑬　これはみじかくないですよ。

も（１）

⑪　ながいベッドもあります。

やすい〔安い〕（４）

(1)⑳　やすいです。

(2)㉝㊱　やすい。

(3)㉞　やすくない。

やわらかい〔柔かい〕（１）

㊶　いいえ、やわらかいです。

よ（９）

⑧　みじかくないですよ。

⑫　なかむらさん、これはいいですよ。

⑯　うすくないですよ。

⑰　こいですよ。

⑲　たかくないですよ。

㉑　たかいですよ。

㉓　かたくないですよ。

資料2　シナリオ全文

題　　名　日本語教育映画
「やすくないです　たかいです」
―― 形容詞とその活用導入 ――

企　　画　文化庁　国立国語研究所

制　　作　日本シネセル株式会社

フィルム　16㎜EKカラー

巻　　数　全1巻

上映時間　5分

制作スタッフ

制　作	静永純一
担　当	神崎晴之
脚　本	道林一郎
演　出	道林一郎、前田直明
撮　影	伊藤三千雄、河村圭司
照　明	水村富雄
車　両	小室博信
編　集	道林一郎、前田直明
ネガ編集	亀井　正
録　音	小林　賢
タイトル動画	アートフイルム
現像所	東洋現像

出　　演　人形劇団　ピッコロ

登場人物　男性（中村）
男性（リー）
店員

カット	画　　面	セ　リ　フ
1	タイトル 日本語教育映画	
2	黒子人形を持って現れる タイトル やすくないです　たかいです	
3	赤いベッド 二人現れる	リー「①たくさんありますね。」
4	見本の前でリー	リー「②このあおいいろのベッドはありませんか。」
5	見回す中村	中村「③えーと、あおいのはないですね。」
6	2人のさがしている所へ店員現われる	店員「④いらっしゃいませ。」
7	ベッドの前へ	中村「⑤これはどうですか。」 リー「⑥これはいいですね。」
8	ベッドをはかるリー	リー「⑦みじかいですね。」 中村「⑧みじかくないですよ。」
9	店員	
10	リーの背丈をはかる中村 そして別のベッドへ 中村、そのベッドの長さをはかる	中村「⑨うーん、せがたかいですね。 ⑩このベッドはみじかいですね。」 店員「⑪ながいベッドもあります。」 リー「⑫なかむらさん、これはいいですよ。 ⑬これはみじかくないです。」 中村「⑭うん、いいですね。」
11	リーの顔	リー「⑮いろはうすいですが。」
12	中村の顔	中村「⑯うすくないですよ。 ⑰こいですよ。」
13	ベッド2つ	

14	のぞきこむリー	リー「⑱これはたかいです。」
15	値段表「５万円」	
16	中村の顔	中村「⑲たかくないですよ。 ⑳やすいです。」
17	リー首を振りながら去る	リー「㉑たかいですよ。」
18	別なベッドの前へ２人来る	リー「㉒かたいですね。」
19	中村座ってみて	中村「㉓かたくないですよ。」
20	リー持ち上げようとするが上がらない 中村簡単に持ち上げて	リー「㉔おもいです。」 中村「㉕おもくないです。 ㉖かるいです。」
21	ソファーになっているベッドを広げてみる中村	中村「㉗ちいさいですか。」
22	リー寝てみて	リー「㉘ちいさくないです。 ㉙おおきいです。」
23	リー起き上がる	
24	のぞきこむリー	リー「㉚たかい。」
25	中村の顔	中村「㉛えっ？」
26	値段表「８万円」	
27	リーの方を中村見て	中村「㉜たかくない。 ㉝やすい。」
28	首を振るリー	リー「㉞やすくない。」 ㉟たかい。」
29	中村の顔	中村「㊱やすい。」
30	リー手を振って去る	中村「㊲うーん、うん。」
31	見送る中村と店員 中村もリーの後を追う	
32	店員の顔	
33	テーブルの前に座っている中村とリー、パンを食べている	中村「㊳このパンはふるいですね。」 リー「㊴あたらしいです。」

		中村「㊵かたいですよ。」
		リー「㊶いいえ、やわらかいです。」
34	肉を切る中村	中村「㊷うすいですね。」
35	肉を切るリー	リー「㊸あつくないですね。 ㊹ハハハ。」
36	肉を食べる中村	中村「㊺まずいですね。」
37	肉を食べるリー	リー「㊻いいえ、おいしいですよ。」
38	こしょうのびん	
39	こしょうを自分の肉にかけ、中村の肉にたくさんふりかけるリー	
	それを1口たべて中村	中村「㊼からい。」
	そこへコーヒーがはこばれてくる	
	砂糖を入れずに中村飲んで	中村「㊽うっ、にがい。」
40	砂糖	
41	リー、砂糖を入れてやる	リー「㊾にがいですか。」
	それを中村のんで	中村「㊿いいえ。」
		リー「51あまいですか。」
		中村「52はい、あまいです。」
		中村、リー「53ハハハハハ……。」
42	出演タイトル 人形製作　和賀仙人 永井要子 佐藤和恵 人形劇団　ピッコロ	
43	企画・制作タイトル 企画　文化庁 国立国語研究所 制作　日本シネセル株式会社	

昭和53年3月

国 立 国 語 研 究 所

〒115 東京都北区西が丘3丁目9番14号